

James Mahoney (2016) " Causality and Time in Historical Institutionalism, in O. Fioretos, T. G. Falleti and A. Sheingate(eds.), *The Oxford Handbook of Historical Institutionalism*, Oxford University Press, pp. 71-81.

James Mahoney (2016) 「歴史的制度論における因果と時間」 pp. 71-88.

➤ 紹介文

本論文は、2016年に出版されたオックスフォードハンドブック「歴史的制度論」に収められている。本稿は、「歴史的制度論」の鍵概念である「クリティカル・ジャンクチャー」、「漸進的変化」、「経路依存性」に着目し、各概念が含意する因果と時間の関係について、図表を用いて明確化している。

➤ 概要

- 福祉国家研究の一潮流である歴史的制度論 (Historical Institutionalism : 以下 HI) は、特定の時代や場所での出来事に焦点を当て、歴史的な因果関係を問うことが多い。
- 本稿は、歴史的制度論における因果(causality)と時間(time)の位置付けについて検討を行う。具体的には、当該分野の鍵概念である「クリティカル・ジャンクチャー」、「漸進的変化」、「経路依存性」の三つに着目する。
- 特に本稿では上記鍵概念に代表される HI 研究の探究の論理を、図表を用いて視覚的に検討することで、HI 研究が特定の結果の説明において「因果」と「時間」の多様な影響関係を想定していることを示す。

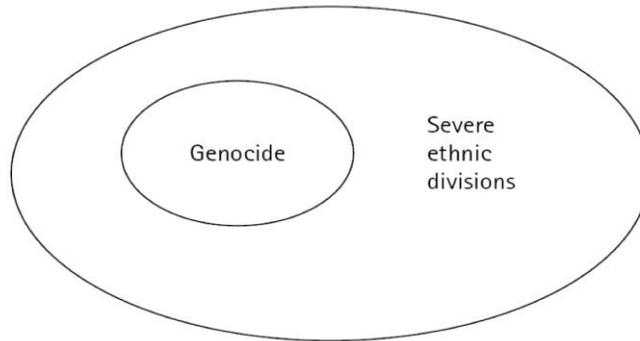
➤ 導入 (71-72 頁)

- HI は、本質的に因果と時間の両方に関心を有している。
 - HI 研究者は、特定の時代や場所での出来事に焦点を当てた歴史的な因果関係の解明に関心を有している。
 - ◇ 例えば「米国における雇用のアフターマティヴ・アクションはなぜ起こったのか」、や「米国と英国はなぜ似たような権力拡張の様式を追求したのか？」等、歴史的なパズルを提起し、ある結果の原因を特定することによって、そのパズルを解き明かそうとする。

- ・ HI は上述した因果と同様に、時間が果たす役割に着目する。特に HI 研究では、結果が生じるまでの順序及び時間的構造(temporal structure)を重視した説明様式が採用されている。
 - ◇ 例えば、Chen(2009)はアメリカの雇用に関するアフターマティブ・アクションとは、1940 年代の「クリティカル・ジャンクチャー(後述)」における公正な雇用をめぐる政党間対立と保守勢力の主導権のもとで引き起こされた、一連の出来事に由来すると指摘している。
 - ・ 以下では、HI の中心的な概念である「クリティカル・ジャンクチャー」、「漸進的变化」、「経路依存性」に着目しながら、これらの概念を用いた HI の根底に存在する因果と時間に関する論理をより明確にする。本稿では上述の課題を検討する上で、時間、出来事、因果を表す図表を分析の中心に据える。
- **分析手法 (72-77 頁)**
- ・ 本研究の手法：図表による因果と時間の描写について
 - ・ 本研究は、HI における因果と時間に関する論理を明確にする上で、「フィルター」アプローチを採用する。
 - ・ 上述の手法は、HI 研究者が原因を、異なる時点に存在しある結果には向かわせるが、別の結果には向かわせないフィルターとして扱っていることを視覚的に捉えるものである。
 - ・ 特定事例における結果を説明するために、HI 研究者は原因を、特定の結果に必要な条件（原因がなければ結果は生じないという関係）、または特定の結果が生じるために十分な条件の組み合わせ（結果を生み出す際に相互作用する原因の組み合わせ）として理解する。
 - ・ 以下の図は、結果が必要条件の部分集合であることを示すものである（Ragin 2000）。例えば、図 4.1a は、ジェノサイドの必要条件として深刻な民族対立を指摘している。ジェノサイドが発生した国は、深刻な民族対立が存在する国の部分集合であることを意味している。

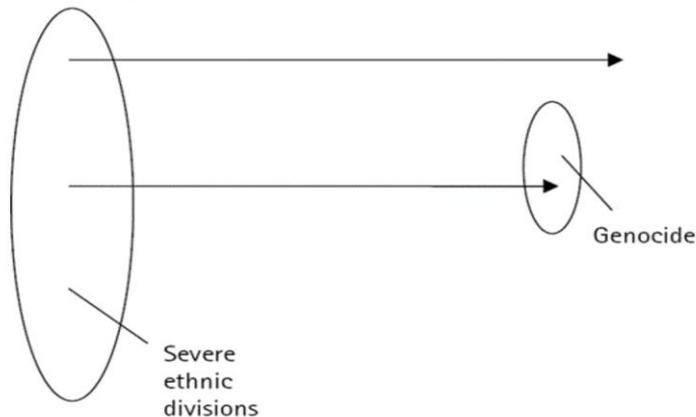
Figure 4.1 Depictions of a Necessary Condition

(a) Set diagram

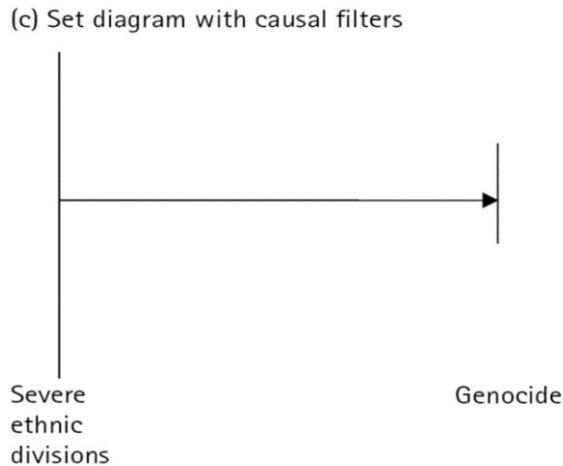


- ・ 上記の関係を因果関係で表すために、図 4.1(b)のように二つの集合を分離して、因果関係の矢印を導入する。この図が示しているのは、国に関する事例が空間を水平に移動し「ジェノサイド」という集合に至るには、まず「深刻な民族分断」という集合を経る必要がある、という点である。

(b) Set diagram with causality

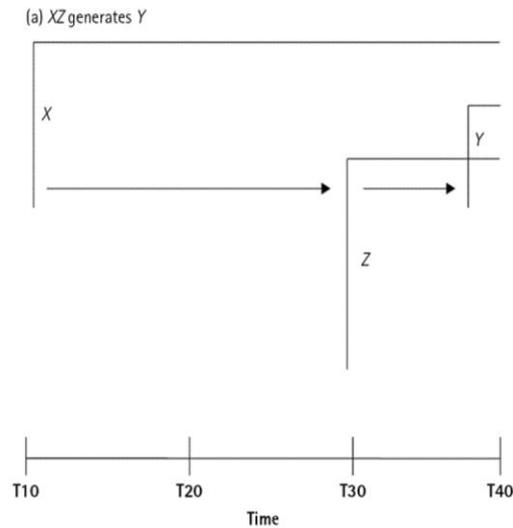


- ・ このような構造を鑑みると、原因（深刻な民族分裂）とは、結果(ジェノサイド)へと至るまでに通過しなければならないフィルターとして考えることができる。このフィルターの考え方は、図 4.1(c)のように、原因集合と結果集合を単純な縦線に変換することで説明できる。本章では因果関係を図式化する際、上述したようなフィルターアプローチを使用する。



- HI は上記の因果への関心に加えて、複数の時点に位置する原因条件の特定、持続時間（ある出来事がどのくらい続くか）、因果的順序（A が B の前に起こるか後に起こるか）などの時間の役割に注意を払っている。
 - Slater (2005) は、権威主義政権が発足する前に紛争的政治(contentious politics)が生じた場合、権威主義政権の持続が可能になることを示した。その一方で、権威主義体制が確立した後に紛争的政治が発生した場合、持続性のある権威主義を維持することはできないことをも示している。
 - ◇ Slater の考え方は、上述のフィルター図に時間的要素を加えることで視覚的に捉えることができる。図 4.3(a)は、結果 Y に対して十分な二つの因果的条件 X と Z を示している。ここでは、条件 X は結果 Y に必要な条件（事例が Y に到達するためには X を通過しなければならない）であり、時間 10 に始まり時間 40 まで継続していることが確認できる。図では、条件 Z は時間 30 から始まり、時間 40 で終了する。X を通過し、その後 Z も通過するケースは、時刻 38 に Y を経験することになる。
 - ◇ 例えば、中央集権的な政府の存在 (Z) と比例代表制・多党制の導入 (X) が包括的・マクロ的な雇用者組合の設立 (Y) につながるという Martin & Swank (2012) の議論では、中央集権的な政府、そして比例代表制や多党制の導入とそのタイミングが、(Y)の結果をもたらすと考えられる。

Figure 4.3



- このように、HI における時間の位置付けは、因果とともにフィルターアプローチによって示すことができる。
- 以下では HI における鍵概念である「クリティカル・ジャンクチャー」、「漸進的变化」、「経路依存性」の三つに着目し、それぞれの特徴について因果と時間の関係を踏まえつつ考察を行う。

➤ **クリティカル・ジャンクチャーとは (77-80 頁)**

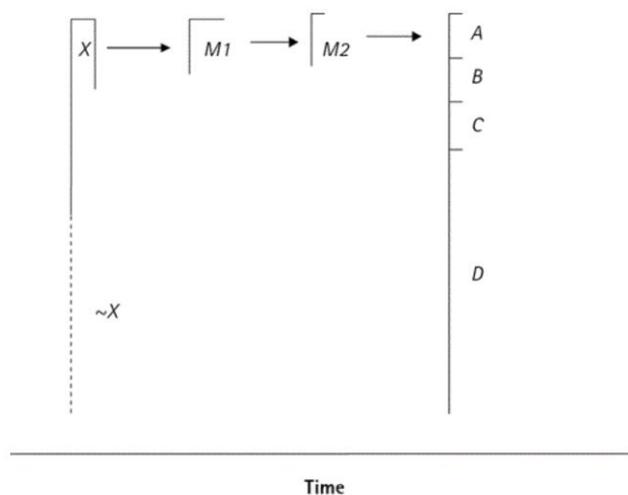
- クリティカル・ジャンクチャー(Critical Junctures)は、比較的短い期間において生じた出来事によって、特定の制度が劇的に変化することに着目した概念である。
 - 上記を言い換えると、クリティカル・ジャンクチャーとは一連の出来事が発生する比較的短い期間を意味する¹。クリティカル・ジャンクチャーの発生は、結果に大きな影響を与えると同時に、結果はその後ほぼ永続的に持続することを含意している。
- ◇ 例えば Solingen and Wan (本書第 33 章)は、核不拡散に関する国際協定の状態について、短期間の協定不遵守がいかに長期的な影響を及ぼしたかを示している。

¹ 荒井によれば、クリティカル・ジャンクチャー (邦語: 重大局面) とは「ある制度が抜本的な変革や制度変化を経験するような歴史上の分岐点」を意味する。具体的には、「戦争、革命、民主化、経済恐慌、突発的事件、政治的出来事、政治制度・体制の変更、隣接する政策領域の政策決定の影響」や、政治組織・集団からの「公式・非公式的な圧力である『強制的圧力』」が挙げられる(荒井 2012: 136 頁)。

- クリティカル・ジャンクチャーは以下の二つの時期を重視する。第一に、将来生じうる結果に対する行為主体の変更可能性が大きい「開口(Opening)」期である。第二に、将来起こりうる結果の範囲が限定される「閉鎖(closings)」期である。すなわち、「短期間のうちに構造の制約が緩むことで〈中略〉、行為主体性や偶発性が、過去からの分岐、あるいは事例間の分岐を形成」する時期を意味する (Soifer 2012)。

- 図 4.5 は、クリティカル・ジャンクチャーにおける「開口・閉鎖」について考える一つの方法を提供するものである。この図はクリティカル・ジャンクチャー(X)が、一連の可能な結果(A、B、C)にとっての必要条件であることを示している。ここでは、クリティカル・ジャンクチャーの終了時に、これらの結果のうちのいくつか(例えば C と D) 閉鎖され、ある特定の結果 (A) がクリティカル・ジャンクチャーによって生じた因果関係(M1、M2)を通じて追跡されうる様子を示している。

Figure 4.5



- このように図式的に考えることで、クリティカル・ジャンクチャーと結果との因果関係を評価する際に生じる問題についてよりよく理解することができる。ここで問題とは HI 研究者が、クリティカル・ジャンクチャーの発生とは過去からの完全な脱却なのか、それとも他の重要な先行要因と複雑に絡み合っているのか、その程度を論じる方法を欠いていることを意味する (Slater and Simmons 2010)。
- 本稿ではクリティカル・ジャンクチャーを、結果に対して「重要な」必要条件として定義する (Ragin 2008; Goertz 2006; Mahoney 2008)。

➤ 漸進的变化 (80-82 頁)

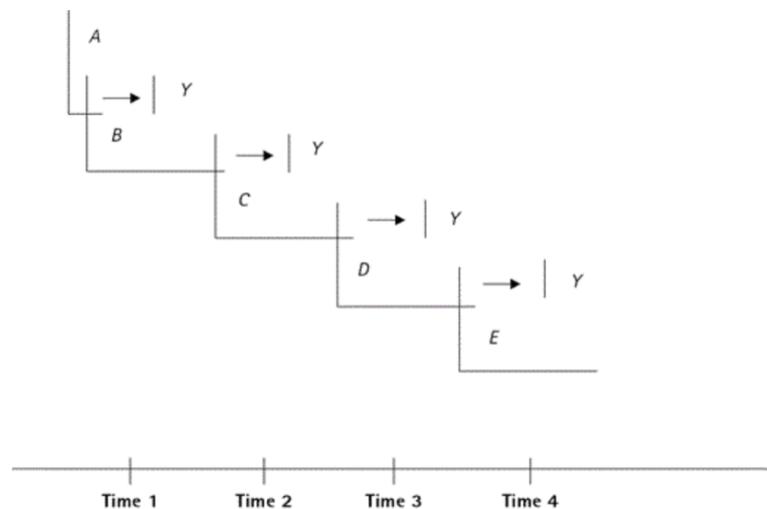
- 制度の安定性を重視した従来の議論に対し、「漸進的变化」という概念を用いて制度の変容やその特徴の把握を試みた、「制度進化論」と呼ばれる HI 研究の潮流がある²。
 - 上述の漸進的变化を提唱した論者は、特定の事例において時間の経過とともに一定の安定・連続性が生じるのは、さまざまな変化に起因するものであり、そうした変化を評価することなしには、制度の安定・連続性を理解することはできないと指摘した (Mahoney and Thelen 2010)。

- 上記した Mahoney and Thelen (2010)の議論は、これまでに用いた必要条件／十分条件のフィルターを発展させるとよりよく理解できる。以下では、漸進的变化に関する二つのパターンについて指摘する。
 - 第一に、Y の安定・持続性を説明しようとするとき、ある要因 A が時間の経過とともに Y にとって不可欠であると仮定する。要因 A は Y の生成を繰り返し助ける必要条件 (不変の原因) であり、Y が維持されるために存在しなければならない。しかし、A は Y にとって十分ではなく、Y を維持するためには他の時間的に変化する原因と結合しなければならない。
 - ◇ これらの他の原因は、歴史的文脈(historical context)に応じて生じる。例えば、時間 1 では A が B と C と結合して Y を生成する。時間 2 では A が C と D と結合する。時間 3 では A が D と E と結合する。このように、Y は時間経過において常に安定しているが、その安定性を生み出す具体的な因果のパッケージは時間的に変化する。
 - ◇ Galvin (2010) は、なぜ共和党が地方の草の根ネットワークを活性化させる能力を備えた全国的な政党に発展したのかについて、漸進的变化のメカニズムを用いて説明している。ここでは、大統領による自党の競争力に関する認識 (時間変動要因) と党の競争力 (不変要因) がパッケージとして組み合わせられることで結果が説明される。

² 「漸進的变化」とは、クリティカル・ジャンクチャーが制度の突発的な変化や制度の持続性に着目する点に対し、行為主体の働きかけや政治・社会的環境に応じた緩やかな制度変化を意味する。上述した漸進的な変化という観点は、クリティカル・ジャンクチャーへの批判とともに、Kathleen Thelen や Streeck Wolfgang、James Mahoney らによって彫琢された(今井 2015 : 21-22 頁)。

- 第二に、結果 Y が持続するためには、結果 Y 自体が時間的に変化する必要があると考えることも可能である。
 - ☆ Y が大学、政府、憲法などの制度や組織であり、その存在が安定しているとす。しかし、安定して存在しているように見える主体は時間の経過とともに徐々に変化しており、この徐々に変化することが Y の持続性に重要となる。
- 上述した二つの漸進的変化のパターンは、以下のように図式化することができる。図 4.6 は、一連の異なる要因の組み合わせによって結果 Y が持続することを示している。しかし、時間 1 では A と B が Y にとって必要であるが、時間 2 では A は Y にとって必要ない。このように Y の再生産に必要な原因は時間によって変化する。また、この図は、Y そのものが時間とともに徐々に変化することを示唆している。

Figure 4.6



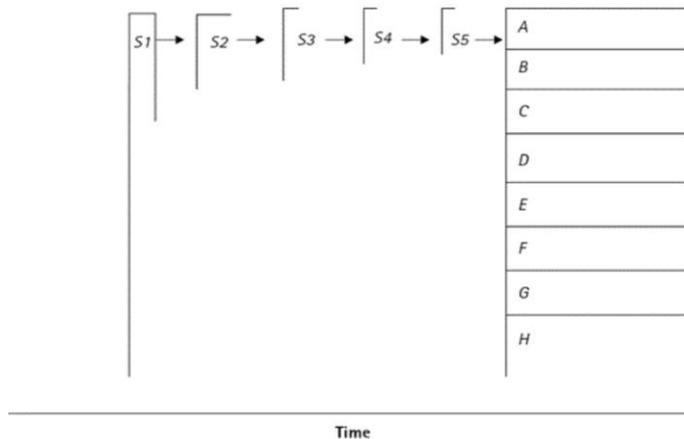
➤ 経路依存性 (82-86 頁)

- 以下では、HI 研究における「経路依存性」概念が有する因果と時間の位置付けを図示するとともに、(a) 自己強化型シーケンス、(b) 反応型シーケンスという二つの観点の存在を指摘する。
- 経路依存性とは、ある制度が特定の方向に進むにつれ、その方向に進み続ける可能性が高くなる一方で、進路の逆行や変更が困難になることを含意する。一般に、経路依存性

の概念では制度を特定の経路に導くには初期の段階が重要であり、その後続くステップは、ある方向へ進むことを補強する役割を果たすと考えられる。本稿ではこれを自己強化型シーケンスと呼ぶ。

- ・ Slater (2005) は、東南アジアにおける権威主義的な制度の定着と永続性を説明する際、二つの自己強化型経路依存過程（制度的プロセスと意識的プロセス）を用いている。
- ・ 図 4.7 は、経路依存の論理を図式化したものである。この図では、まず、さまざまな結果（A、B、.....H）を幅広く許容する条件(S1)が想定される。最初のステップにおいて将来の可能性の幅が劇的に狭まり、ほとんどの結果が排除される。各ステップは次のステップに引き継がれ、前のステップで確立された方向性を補強する。結果 A が確実になることはないが、時間とともに A へと向かう可能性は高まっていく。

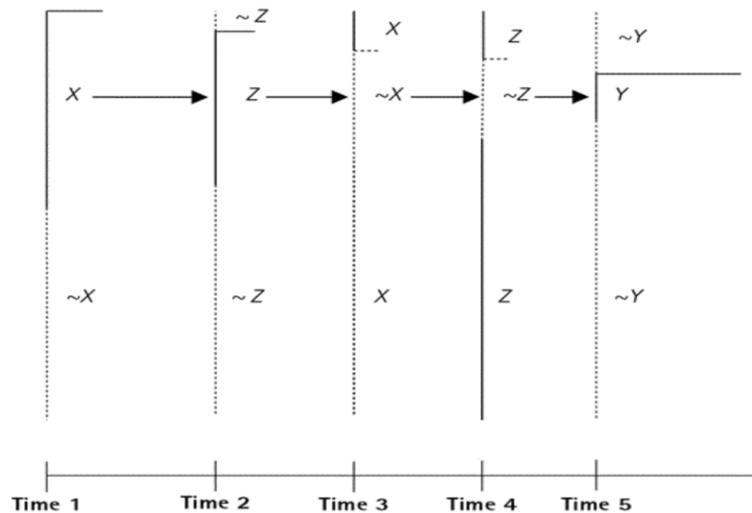
Figure 4.7



- ・ 経路依存性に関するもう一方の議論では、経路依存性それ自体を自己強化的とはみなさない。経路依存性の中核的な特徴とは、重要な分岐点と最終的な結果を結ぶ軌道を構成する、緊密に結合し、因果的につながった事象の連鎖の存在を示す点にある。本稿はこのような観点を、反応型シーケンスと呼ぶ。反応型シーケンスは、一つの出来事から次の出来事へと素早く移行することもあれば、逆転を意味するバックラッシュの過程の両方を含むことから「反動的」であると言える。
- ・ Posner(2010)は、米国における先行者利益(FAM)と強力な金融業界の存在にもかかわらず、米国と EU 規制当局間の交渉の往復によって、金融取引に関する多国籍かつ民間運営による基準設定機関の創設につながったと示している。
- ・ 図 4.9 は、バックラッシュ過程を含めて反応型シーケンスの因果関係の論理を描い

たものである。この図において、必要条件フィルタ (X 、 Z 、 $\sim X$ 、 $\sim Z$) は、結果 Y に対して徐々に近づいていくことを示している。この図のバックラッシュは、時間 3 において、 X ではなく $\sim X$ を経験したときに起こる現象である。つまり、 Y に到達するためには、当初の選択(X)を覆し、別の選択($\sim X$: 時間 1 において存在)を採用するというバックラッシュを経験しなければならない。

Figure 4.9



➤ 結論 (86-87 頁)

- 本稿では、HI 研究における因果と時間の論理について、両者の関係を視覚的に描いた図表とともに明らかにした。とりわけ本稿では、HI 研究者が特定の事例が通過(pass)するフィルターとして原因を位置付けていることを指摘した。
- 本稿全体で検討したように、この分野で研究されている変化のパターンを理解するためには、変化のパターンを構成する因果的なプロセスと時間的なプロセスの両方の性質について問いを投げかけなければならない。本研究はこれらの過程を記述し、理解するための新しいツール(図表)を提供した。

➤ 参考文献

今井真士, 2015, 「比較政治学における歴史的制度論・比較歴史分析の着想の発展——科学哲学的基礎の模索から論理学的基礎の探求へ——」『文教大学国際学部紀要』26 (1), 17-32 頁.

荒井英治郎, 2012, 「歴史的制度論の分析アプローチと制度研究の展望——制度の形成・維持・変化をめぐって——」『信州大学人文社会科学研究』(6), 129-147 頁.